

開催地名	東京都狛江市
開催日時	令和8年2月15日(日) 10:00 ~ 11:30
開催場所	東京都狛江市防災センター
語り部	犬飼 一博 (愛知県名古屋市)
参加者	7組の親子15名
開催経緯	狛江市では過去に数回、多摩川による水害被害があった。今日は台風災害を知り、備えの大切さについて考えてもらうきっかけになればと思います。
内容	<p>大雨から大切な命を守ろう！ 親子で学ぶ防災学習 ～逃げ遅れゼロに向けた防災啓発～</p> <p>(1)はじめに 「親子で学ぶ防災教室」ということで、私が学校を中心に実施している防災講座の内容をもとに、VR(映像)による浸水疑似体験やAI語り部との対話体験、AIの画像認識機能を活用したカードクイズ体験、ペットボトルを使った防災実験などの体験や、狛江市での水害などを映像も交えて学び、水害を自分事として捉え、楽しく学ぶことを目的に講座を行った。</p> <p>(2)逃げ遅れゼロに向けた取り組みとその背景 近年、全国各地で甚大な水害により、逃げ遅れによる被害が多発している。中部地方では東海豪雨以来、広域的な大規模水害が発生していない。また、災害を経験していないことが避難の遅れに繋がっているというデータもある。そのような状況を踏まえ、デジタル技術を活用したVRによる浸水疑似体験や人気ゲームソフト「あつまれどうぶつの森(あつ森)」を活用した啓発動画、アナログ媒体による「大雨に備えるピクトグラム」などトレンドを意識した啓発ツールを用い、防災に興味の無い人を始め、大人から子供、障がいのある人まで、より多くの人に早期避難の重要性が伝わる防災啓発に取り組んでいる。防災講座を受講した人数は約18,000人(令和7年12月末現在)、VR体験者は約1万2000人である。</p> <p>(3)VR(映像)で浸水を体験しよう！ VRによる浸水疑似体験は、大雨特別警報が発表されても避難を躊躇して逃げ遅れる家族をモデルとして、逃げ遅れによる被害を疑似体験するもので、特別警報を待たずに早期避難を促すことを目的としている。浸水疑似体験は、水害の恐さが伝わり、水害を自分事として捉えるきっかけになる。特に若年層には受け入れやすく有効である。体験後には各自の避難行動の振り返りや、映像の</p>

内容を〇×クイズも交えて参加・体験型で行うことで効果的な学習となっている。

#### (4)過去の大水害を学ぼう！

防災は、過去の災害を知ることから始まる。住んでいる地域の地形や地質は変わらない。過去に水害が起きたところは、再度起きるかもしれないことを認識し、地域で起きた水害を学んで、発生し得る水害をイメージすることと当時の行動や対策を学ぶことが今の備えに繋がる。

狛江市では、TBS ドラマ「岸辺のアルバム」で全国放映された、昭和 49 年 9 月 1 日の多摩川の堤防が決壊した多摩川水害（狛江水害）、狛江市も浸水した令和元年東日本台風などで甚大な被害を受けている。多摩川水害では、多摩川の堤防が約 260m にわたり決壊し、19 戸の家屋が流出した。狛江市の資料によると、この水害を知っている人は小学生では約 3 割、20 代では約 4 割となっている。決壊場所の河川敷には、「多摩川決壊の碑」が建てられ、当時の記憶を伝えている。

また、東京を襲った台風は、昭和 22 年（1947）のカスリーン台風、昭和 24 年（1949）のキティ台風があるが、昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風でも被害を受けている。伊勢湾台風では全国で 5,000 人以上の命が失われたが、高潮による被害が大きく、愛知県・三重県では海拔ゼロメートル地帯という濃尾平野の地形も被害を拡大させた。近年でも類似の進路を辿る台風もあり、平成 30 年の台風 21 号では関西空港が浸水するなどの被害が発生した。たまたま自分たちの住む地域で発生していないだけであり、他地域で発生した水害でも自分たちの地域でも起きるかもしれないと自分事として捉えることが大切である。

また、令和元年（2019）東日本台風では、多摩川流域に大雨を降らせ、東京都に大雨特別警報が発令されるなど、狛江市でも浸水被害が発生した。この台風と類似の進路予想であったのが昭和 33 年（1958）の狩野川台風であり、静岡県を中心に多くの死者を出す被害となったが、東京都でも荒川・江戸川低地を中心に甚大な浸水被害が発生している。

過去の水害を伝承することは重要であるため、当研究所では新たな取組として、「A I 語り部で伊勢湾台風を伝承」するものや、「A I の画像認識機能を活用した水防災クイズシステム」を開発して啓発を行っている。A I を活用した「伊勢湾台風 A I 語り部」は、伊勢湾台風から 67 年が経過し当時を伝えられる人も少なくなっている中、災害体験者による口頭や当時の記録による文書での伝承ではなく、A I 語り部により伝承するシステムである。体験した子供たちからは、「本物のおじいさんと話をしているみたいで A I ってすごいなと思った。」「体験したことや実際にあったことを詳しく分かりやすく教えてくれ

た。」「人と話すより話しやすい。」などの好意的な意見が多く、楽しく学習出来ている様子が伺える。

#### (5)住んでいる地域のことを知ろう！

当研究所の調査によると、ハザードマップを知っている小・中学生は約9割であるが、そのうち自宅の浸水深まで確認した人は1割にも満たない。

浸水深まで確認しないとハザードマップを知っていることにはならない。ちなみに、多摩川の氾濫により、狛江市役所周辺では50cm～3m、狛江駅周辺では3m～5mの浸水深となっている。また河川の氾濫だけでなく、雨水が排水できずに溜まってしまう「内水氾濫」もある。地域のリスクを把握してイメージすることが適切な避難行動に繋がる。

#### (6)まとめ

「自分の命は自分で守る」「大切な人の命を守る」ため、


- 1 事前に備えることとして、非常食や避難用品などの準備、ハザードマップで住んでいる地域の災害リスクを必ず確認すること。
- 2 情報収集として、災害・防災情報に敏感であること、そして普段から情報収集に慣れておくこと。
- 3 万一に備えて避難場所や避難ルートを予め決めておき、早めに避難することが大切である。

地震はいきなり発生するが水害は発生が予測できる。水害は準備する時間があるということであり、早めの避難行動が大切な命を守ることに繋がる。

本日、視聴した浸水疑似体験映像は「1minute1second (ワンミニット、ワンセカンド)」とタイトルを付けている。これは、1分でも1秒でも早く避難してほしいという思いを込めて付けたタイトルなので、今後、大雨の時期には今日のことを思い出し、大雨から大切な命を守ることに繋げていただければ幸いである。

#### (7)その他

講座終了後、参加の皆さんに、VRによる浸水疑似体験、AI語り部との対話体験、AI水防災クイズを行っていただいた。

	
開催地より	<p>子育て世代や小学生を主な対象として、風水害時における避難や備えの重要性についてご講演いただきました。実験やクイズ、東京都狛江市の地域特性を織り交ぜながらご講演いただいたことで、対象者が終始飽きることなく聴講するとともに、「家族で防災を考えるきっかけとなった」といったアンケート回答を多数いただき、市の防災力の向上に繋がったと実感しております。</p>